

<2016年10月月例会報告>

第31回オリンピック競技大会柔道競技参戦記

川戸 湧也 (筑波大学大学院/全日本柔道連盟科学研究部)

【日時】2016年10月21日(金) 19:00~21:00

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】第31回オリンピック競技大会柔道競技観戦記

【演者】川戸湧也 (筑波大学大学院/全日本柔道連盟科学研究部)

【参加者(会員・メンバー)10名】安藤裕一 (GMSS ヒューマンラボ)、奥山純一 (プログラマー)、川戸湧也 (筑波大学大学院)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、小池靖 (サッカースポーツ少年団・さいたま市)、小山基彰 (ヒーローインタビュー)、嶋崎雅規 (国際武道大学)、関谷綾子 (関谷法律事務所)、高田勝敏、中塚義実 (筑波大学附属高校)

【参加者(未会員)2名】奥山由紀子 (会社員)、中田一朗 ((株)クエスト)

<目次>

1. 現地レポート
 質疑応答
2. 柔道競技の詳細
3. サポート内容
 質疑応答

<概要>

発表者は全日本柔道連盟強化委員会科学研究部に所属し、各種国際大会における選手サポートに従事している。今回の月例会では発表者がスタッフとして参加した第31回オリンピック競技大会柔道競技(以下、リオ五輪)について、オリンピックパークならびにハイパフォーマンスサポートセンターを中心とした現地レポートを交えながら、柔道日本代表チームに対するサポート活動(主に情報サポート)の内容について報告した。

1. 現地レポート

・質疑応答（Q：質問、A：回答、O：意見）

Q：HPSC など各国が現地に設けたサポート施設はどこが資金を拠出しているのですか？

A：サポート施設は設置した国独自のものなので、各国の競技団体、競技統括団体が負担をして設置しています。ロンドン五輪からこのような施設を作っていますが、ロンドン、リオといずれも過去最高のメダル獲得数を記録していることから、このような“ミニNTC/ミニJISS”のような施設を現地に設けることは非常に重要であると言えます。

Q：このような施設を作ったことで最も恩恵があったのはどのような点ですか？

A：やはり食事だと思います。選手村の食事はマクドナルドなどの高カロリーな食事が多く、また我々日本人に馴染みのない味の食事が多く聞いています。その中でバランスの良い食事を心がけて摂取することは可能だと思いますが、味や雰囲気などといった点でやはり普段通りの食事というのは難しい環境にあります。その点においてHPSCで日本食を出してもらえるというのは大きな強みであったと思います。あと洗濯ですかね。柔道はもちろん柔道衣を着用して行いますが、その洗濯というのが海外ではなかなか大変です。これは自分の経験でもあるのですが、脱水がしっかりできるとかというのは重要だと思います。

Q：選手たちのすべての食事はここ（HPSC）で管理したのですか？

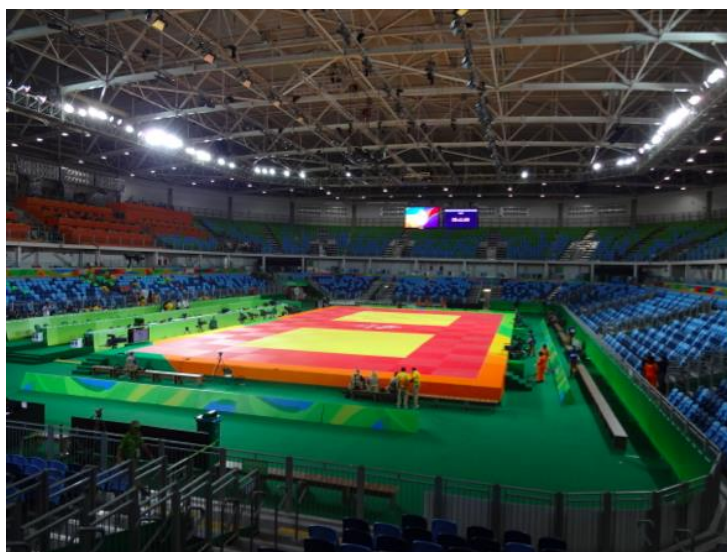
A：競技団体によって異なりますが、柔道の選手についてはHPSCで摂りました。選手村からHPSCまではシャトルバスが通っているので選手たちは自由に行き来しながら利用していました。柔道に関していうと、減量などもあるので自由に食事をするというのは難しいので、ここで食事するように指示があったと思います。

Q：「選手村の食事は食べるのはしんどい」とフェンシングの太田選手が言っていました。

A：そうですね。やはり食事に気を遣わなければならない環境というのでは競技に集中できないと思います。

O：理想と現実の話でいうと、本来の五輪の目指す姿でいうと、選手村に各国の選手が集まって交流して世界平和を実現しようという狙いがあると思いますが、今の話を聞いていると良いパフォーマンスを発揮するためにはそんなことをしていたらダメだということですよ。ジレンマですね。

A：選手村の景観でいうと、あそこはビルが立ち並んでいるんですけど、各国にそれぞれビルが割り当てられているんですね。例えばアメリカなんかだと、ビルの側面に星条旗が掲げられていたり、中国やオーストラリアなんかだとビルをまたがって「TEAM」「CHINA」という感じでアピールしていました。北朝鮮チームなんかだとビルをぐるっと一周国旗で巻いてしまっていましたね。交流というよりも自己顕示欲の塊というか、バチバチした感じがしました。



Q：(スライド 10 を見ながら) これは真ん中の写真に「カポエイラ」って書いてあるけど、ここは常設の道場ですか？

A：いえ、ここは常設の道場ではなくて施設の体育館らしいです。ここは柔道競技が終わったらレスリングのマットが敷かれたらしいですね。

Q：他の種目と比べても柔道のスタッフは多いですか？

A：多いですね。やはり十分なサポートをするには必要な人数ですね。

2. 柔道競技の詳細

柔道競技に出場できる選手は世界ランキングによって決まる。男子は上位 22 カ国、女子は上位 14 カ国の選手である。ただし 1 国 1 選手の原則があるため、重複した場合にはより下位の国でも出場ができる。リオ五輪でいうと、上に述べた 22 カ国/14 カ国に加えて、開催国枠、大陸枠、難民枠が設定されていた。このうち大陸枠とは、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、パンアメリカにそれぞれ人数を割り当て合計 100 名の選手が参加できる仕組みである。すなわち、世界ランキング上位に入っている選手がいない国であっても各大陸予選を勝ち抜いていれば出場できるのである。さらに難民枠では内戦・紛争などで母国が五輪に参加できる状況なく、自身も母国を離れて活動している選手であっても個人として五輪への参加を認める仕組みである。このようにしてリオ五輪では各階級とも男子 32 名、女子 24 名が出場した。

柔道競技の詳細

リオデジャネイロ五輪における柔道競技

参加資格=男子：上位22カ国（22名）
女子：上位14カ国（14名）+開催国枠（各7）+大陸枠+難民枠

試合時間=男子：5分間
女子：4分間

競技日程=8月6日～12日迄（7日間）
1回戦から決勝戦まで、男女1階級ずつ1日で行う。

3. サポート内容

全日本柔道連盟強化委員会科学研究部（以下、科研）では大会期間中選手・監督・コーチに対する情報サポートを実施した。情報サポートとは大きく 2 つに分けられる。1 つは現地で試合を撮影し、日本代表選手が次に対戦する選手の情報を収集し、過去の映像データとともにコーチ・監督に提供する即時フィードバックである。もう 1 つは HPSC 内で試合映像から、競技分析を実施し、大会期間中の戦略検討、大会後の競技検証ならびに今後の強化に資するデータをまとめるための映像分析である。今回はこの 2 つの業務をそれぞれ分担して実施した。

科研では「GOJIRA」と呼ばれる映像分析システムを作成し、分析活動を行なっている（写真は割

サポート内容

全日本柔道連盟強化委員会科学研究部のサポート活動

- ▼映像収集
- ▼競技分析
- ▼即時フィードバック
- ▼マットオーダー（試合順）の作成
- ▼試合の記録

etc...

リオ五輪におけるサポート

HPSCにおける映像分析



試合会場における即時FB

愛)。このシステムの導入により、分析ならびに情報のフィードバックが格段に早くなった。今後の国際大会においても活用を進めていくが、我々もわが国の柔道競技の競技力向上のために一層の努力をしていきたい。

質疑応答 (Q : 質問、A : 回答、O : 意見)

Q : 日本選手団は何名だったのですか。

A : 統括プロデューサー1名、チームリーダーが男女各1名、監督が男女各1名、コーチが男女各5名、チームドクターが男女各1名、トレーナーが男女各1名で、これに選手が男女各7名ですね。他のスタッフなどは「研修団」として派遣されておりまして、そこに私たちも含まれます。総勢50名近いと思います。

Q : 分析は“何”を単位に実施するのですか？

A : 分析は“個人”を対象に実施しています。研究発表などで例外的に国ごとにまとめる場合もありますが、基本的には個人を単位に分析をしています。

Q : 今後も分析を実施して行くにあたってユース世代、ジュニア世代の選手を追跡して分析していくことは非常に重要だと考えますが、科研としては何か取り組みはされていますか。

A : 現状ジュニア世代の試合まですべてカバーして分析をするというのは難しいです。やろうと思えばできるのかもしれませんが、時間的な問題と人的な問題で難しいと思います。もちろん必要性は感じていますので、やって行く方向で動くのかなとは思いますが、私ではわかりかねます。

Q : 分析について、これはどの程度の能力があればできるものなのですか？

A : 普通に柔道をやっているだけの学生には、おそらくできないと思います。ここにはわかりやすい技を示しているのですが、柔道には見た目が似通った技がいくつか存在していて、なぜ技が決まるのかという理合を理解していないと分析は難しいと思います。やはりトレーニングをしないと難しいと思います。

追記 : 月例会当日のスライド中に Web 上に公開することが難しい写真、資料を用いてお話をさせていただいた箇所があります。したがって本報告書の作成にあたって、記載しなかった箇所がございます。あらかじめご了承ください。幸いです。